

伝統の継承が未来を拓く

ひろせ さかえ
やぶ 養父市長(兵庫県) 広瀬 栄



『市政』から「マイ・プライベート・タイム」に興味や思い出などを投稿しては、とのお話を受け、自身のことや養父市のことを知っていただく良いチャンスと考え承諾しましたが、いざ筆を執ってみるとあまりに取りえのない自分自身の半生に驚くとともに、軽々しく投稿の応諾をした浅はかさを後悔しています。

私は、昭和22(1947)年、世に言う「団塊の世代」のトップランナーとして生まれ、善きにあしきに時代の申し子と言われてきた多くの仲間の1人です。太平洋戦争の傷痕がまだ残る中、実体験として戦争を知らない世代、また戦後の高度成長に歩みを同



CM方式、ECI方式を採用し整備したやぶ市民交流広場(愛称:YBファブ)

じくし、少年期、青年期を成長してきた世代です。

高校、大学を卒業し、故郷を離れ、民間企業に勤めましたが、結婚後自身の生き方を見つめ直す中で故郷に帰る決意をし、地元の養父市(旧八鹿町^{ようか}役場)に働き場所を得ました。そうした私を故郷は温かく迎え包み込み癒やしてくれました。

民間企業での勤務経験は、私の人生観や仕事に向き合う姿勢に大きな影響を与えました。各種行政サービスの向上や、公共調達における品質やコスト、納期意識の低さ、委託体質、責任所在の曖昧さなど、経営感覚の希薄さが指摘される役所での業務を、顧客である市民にとって、いかに成果が残せるものにするか、行政経営手法、仕組みの改善に向けて大きな力となりました。

持続可能な行政経営を実現させるためには、従来の制度や手法に固執することなく、民間の知恵と工夫を行政に生かす官民連携の積極的推進が必要と考え、PFIやCM、ECIの導入など、新しい時代に合った新しい行政手法、公共調達の在り方などに考えを巡らせています。また、地方創生の実現と地域に新しい経済活力を生み出すためには、野心的かつ革新的な挑戦が必要と考え、国家戦略特区の地区指定を受け、鋭意取り組みを進めています。

さて、私の趣味ですが、読書とウォーキング、溪流釣りです。



平成16(2004)年 養父郡八鹿町、養父町、大屋町、関宮町の4町が合併して養父市発足

読書は小説を中心にドキュメント、専門書など興味のあるものなら何でもよくて、未知の世界に私を誘ってくれます。仕事や悩み事で疲れた頭脳と心に安らぎと余裕、勇気と元気という栄養を与えてくれます。

体を動かすことが大好きで、たまの休日は農業やウォーキングなどにいそしんでいます。本市には兵庫県最高峰の氷ノ山^{ひょうのせき}があり手軽にファミリーで登山ができる山として多くの人々が頂上を目指します。晴天の山頂から眺める日本海や山々の景色はしばしわれを忘れるほどです。

若い頃はよく溪流釣りに行きました。地域の84%が山である本市は多くの清流に恵まれ、そこには熊や鹿、猿などの野生動物もいますが、山女魚^{やまめ}などの溪流魚も多く生



名医「やぶ医者」ゆかりの墓所でパワーをもらう筆者

息します。警戒心の強い溪流魚との知恵比べは、研ぎ澄まされた感覚の中に何とも言えぬ緊張が漂い、ヒットしたときの感触と満足は何物にも代え難いものがあります。年を重ねた今は溪流に赴くことはできませんが、清流と溪流魚、釣りの仕掛けを思い浮かべ、空想の中で山女魚たちとの知恵比べを楽しんでいます。

やぶ医者大賞は名医を表彰します

江戸時代、松尾芭蕉の門人である森川もりかわ許六きよろくが編さんした『風俗文選』という書物が

あります。それによると、ある名医が但馬たじま国養父という所に住み、死んだ病人を生き返らせるほどの治療を行って評判になりました。しかし、これを悪用して「自分はやぶ医者である」と言って病人を信用させるニセ医者が出回り、「やぶ医者」は「ヘタな医者」の代名詞となりました。

本市では名医「やぶ医者」の故事にちなんで、平成26(2014)年に「やぶ医者大賞」を設立し、過疎地域で医療に携わることの魅力を発信し、地域医療の確保に活躍している全国の若手医師を顕彰することとしました。本年の第8回やぶ医者大賞は、滋賀県長浜市と北海道松前町の医師に決定し、11月に本市で表彰式と受賞者講演会を開催する予定です。

養蚕の父、上垣守国生誕の地

本市は、養蚕業の礎を築き、日本の近代の扉を開いた上垣守国のふるさとです。江戸時代後期、上垣守国は国内各地を訪問して養蚕技術を研究し、『養蚕秘録』を出版しました。この本をシーボルトがオランダに持ち帰り、その後、フランス語に翻訳されてパリとトリノ(イタリア)で出版されました。日本の養蚕技術



養蚕の父、上垣守国の出版した『養蚕秘録』

がヨーロッパで注目され、「日本の技術輸出の第1号」となりました。

明治時代、養父市大屋町で製糸場を創立した小倉寛一郎は、製糸場の改修のため富岡製糸場を視察して渋沢栄一に教えを受け、自宅に富岡式の製糸工場を建設しました。その後、但馬各地で製糸工場が造られていきます。

こうした繊維産業は今では衰退していますが、先端技術によりカイコを利用した医療品などの開発が注目されています。昨年、市内の会社が農地29aを取得し、カイコの餌となる桑の木の栽培を始めたほか、本年8月に、本市と「カイコ冬虫夏草」を使った機能性食品を手掛ける企業と新しい養蚕業の復活を目指して、連携協定を結びました。

おわりに、農村という場所は稲作を通じて結ばれた共同の社会です。農業の結び付きが、まちの誇りや村に住む意義をもたらします。先人から受け継いだ歴史、文化、伝統、大切な農村の暮らしを次代に継承するとともに、本市が全国の中山間地域のモデルとなるべく、魅力的で活力あるまちづくりにまい進していく所存です。